

13. 聖化

ペテロの手紙#13

<https://ichthys.com/Pet13.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

復習： 種まきのたとえ ([マタイ 13 章 1-9 節](#); [マルコ 4 章 1-9 節](#); [ルカ 8 章 4-8 節](#)) の学びの中で、私たちは三つの「悪い土壌」のカテゴリーを見ました。これらは、神のご計画に対する態度が非常に否定的であったために、霊的成長が妨げられた人々の三つのタイプを表しています。このよく知られたたとえ話で取り上げられている三つの基本的な「信仰上の問題」は次の通りです：

- (1) **信仰の欠如：** 硬く踏み固められた心は、神の御言葉が入ることを許さず、キリストとそのメッセージを完全に拒む。
- (2) **信仰の喪失：** 犠牲があまりにも大きくなると、岩地のような心の持ち主はキリストとそのメッセージを放棄してしまう。このような心は、神の御言葉が深く根を下ろすことを許さない。
- (3) **信仰の制限：** この世の悩みや誘惑が優先され始めると、いばらのような心の持ち主はキリストとそのメッセージを次第に無視するようになる。この心は、神の御言葉が成長し、実を結ぶことを妨げてしまう。

私たちの心に蒔かれる「種」は神の御言葉です ([ルカ 8 章 11 節](#))。そして、その御言葉に対する私たちの注意深さ、忠誠、応答、そして従順こそが、私たちの「信仰の植物」を成長させる要素となります。この信仰は「良い地」においてのみ繁栄します。すなわち、神がご自身の人生に対して持っておられるご計画に従うことを決意している信者の心の中でのみ、信仰は真に成長するのです ([第一ペテロ 1 章 7 節](#))。

神の壮大なご計画 (God's Master Plan)： 神は私たちを限りなく愛しておられ、その愛ゆえに、ご自身の尊い御子を私たちのために犠牲にされました。これは、私たちが御子を信じることによって、永遠に滅びることも、裁かれることもなく、むしろ神とともに永遠に生きることができるようにするためでした ([ヨハネ 3 章 16 節](#))。この神の恵みに満ちた救いの申し出を受け取るためには、私たちは神の御心に従う必要があります。その最も基本的な枠組みは、次の三つの段階から成っています：

- (1) まず第一に、私たちは神の御子に信仰を置かなければなりません。そうすることによって、私たちはイエス・キリストを信じる者、すなわち「信者」となるのです。
- (2) 一度信じたら、この世で生きている間、キリストに従うことが神のご計画です。
- (3) この世の生が終わるとき、神はすでに私たちのために、驚くべき永遠の世界を備えておられます。

キリストをすでに信じている私たちにとっては、神の御計画の第一段階(救い)はすでに成就しています。そして第三段階(永遠)は、神の定められた時に到来します。

今、私たちの前にある課題は、この地上で生きている間にいかにして主に従うか、すなわち、神がすべての信者のために備えられた御計画の第二段階に、どのように心と力を集中させて歩むかということです。

聖化--神のご計画の目的： 神のご計画の三つの各段階において、神が私たちに望んでおられる目的は、「聖なる者となること」、すなわち「神ご自身が聖であられるように、私たちも聖となること」です([第一ペテロ 1 章 16 節](#); [レビ記 11 章 44-45 節](#))。私たちがこの「聖なる者」とされていく過程を「聖化(サンクティフィケーション)」と呼びます([ヨハネ 17 章 17 節](#); [17 章 19 節](#))。「聖化する」というギリシヤ語 *ハギアゾー* (*hagiazō*: ἁγιάζω) は、「聖別する」「神聖なものとする」を意味します。つまり、何か(この場合は私たち自身)を俗なる領域から取り分けて、神の領域へと移すことです。聖化とは、神が私たちを造り変え、神とその御子と永遠に共に住むのにふさわしい者へと整えてくださる働きなのです。神はそのご計画の各段階において、私たちを清めてくださいます。第一段階(救い)では、神は私たちの名を潔白にし、天における罪の告発の下から解放してくださいます([コロサイ 2 章 14 節](#))。第三段階(永遠)では、私たちに新しいからだを与え([第二コリント 5 章 1-10 節](#))、現在の肉体に宿る罪の性質([ローマ 7 章 17 節](#))から完全に解放してくださいます。第二段階(地上の生涯)では、神は私たちに、神の力と恵みによって自らを変え、神の栄光と慈しみを映し出す者へと成長していく機会と責任を与えてくださいます([ローマ 12 章 2 節](#); [第二コリント 3 章 18 節](#); [エペソ 4 章 22-24 節](#))。

1. キリストにおける聖別： 私たちがイエス・キリストを信じたとき、私たちは『聖別された者』となりました。([第一コリント 6 章 11 節](#))。これは言い換えれば、神の帳簿の中で、私たちの名前が「俗なるもの」の欄から「聖なるもの」の欄へと移されたということ

す。私たちがキリスト者となったその瞬間から、神はもはや私たちを怒りの対象([ローマ 1 章 18 節](#))としてではなく、愛の対象([ローマ 8 章 39 節](#))としてご覧になります。

神はすでに、私たちを「聖なる者」と正式に宣言されたのです。この聖化の行為は、決して神の聖なるご性質を損なうものではありません。なぜなら、イエス・キリストが私たちのために十字架で死なれることによって、聖化のための代価をすべて支払ってくださったからです。また、この特権的な立場は、私たち自身の努力によって得られたものではないことにも注意すべきです。救われる以前にどのような人間であったかは、現在の「聖なる者」という地位にいっさい影響を及ぼしません。なぜなら、この最初の「位置的な聖化(positional sanctification)」は、ただイエス・キリストのなされた御業のゆえにのみ与えられるものだからです。私たちはキリストの聖なる「立場(position)」を共有しているのです。キリストと自らを結びつけ、キリストが私たちのためにしてくださった御業を受け入れることによって、私たちは「聖なる者」とされるというこの恵みを受け取ります。それは、私たち自身の行いでも、功績によってでもなく、ただ神の恵みによって与えられるのです。

2. 永遠における聖化：この最後の段階の聖別(sanctification)も、同じように完全に神の御業(わざ)によるものです。私たちがこの世の生を終えると、「もはや悲しみも、涙も、苦しみもない」([黙示録 21 章 4 節](#))という驚くべき永遠の世界に入ります。復活の時、私たちの現在の体は、新しい、永遠に朽ちることのない体へと変えられます([ピリピ 3 章 21 節](#))。こうして私たちは、名ばかりでなく実際にも真に聖なる者となるのです。もはや、私たちの聖さを損ない、神から引き離すような罪や不従順の行為を行うことは不可能となります([黙示録 21 章 27 節](#); [第一コリント 15 章 35-57 節](#))。ですから、救いの瞬間においても、復活の時においても、この新しい聖なる身分(聖別)への変化は一瞬のうちに起こり、私たち自身の努力を必要としません。なぜなら、それは完全に神の御業だからです。

3. 信仰生活における聖化：私たちはすでに「聖なる者」とされた者です(キリストの御業に基づく神の宣言によって)。やがて「聖なる者」とされます(復活の時、罪なき体を受け取ることによって)。したがって、神の御心は、今この地上で「聖なる者」となることなのです([ローマ 6 章 19-22 節](#); [エペソ 5 章 26 節](#); [第一テサロニケ 4 章 3 節](#); [ヘブル 12 章 14 節](#); [第一ペテロ 1 章 15-16 節](#); [第一ヨハネ 3 章 3 節](#); [黙示録 22 章 11 節](#))。私たちがクリスチャンになったとき、すぐに完全な人になったわけではありません。私たちは、キリストにある新しい人生に、あらゆる欠点を抱えた罪深い性質を持ち込んでいます([ローマ 7 章 17 節](#))。クリスチャンとしての今の私たちの課題は、変わることです。私たちが救われてこの地上にとどまるのは、この変容を完成させることによって神を讃えるためであり、その変容は、世が私たちの中に神の栄光が映っているのを見ず

にはいられないほど驚くべきものです([第二コリント 3 章 18 節](#); [ペリピ 2 章 15 節](#))。私たちがここにいるのは、神が救いのときに私たちのうちに始められ、永遠に完成される「聖さを完成させる」ためなのです：

愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろう。聖さを全うしよう-新改訳IV>ではないか。([第二コリント 7 章 1 節](#))

心を聖めること：では、「聖くなる」とはどういう意味でしょうか？また、罪深い人間である私たちが、どのようにして「聖化される」のでしょうか？まず理解しておくべきことは、「聖さ」とは何ではないか、という点です。たとえば、外面的に人から「聖い」と見られることが、真の聖さを意味するわけではありません。イエスはパリサイ人たちを「白く塗った墓」にたとえました。それは、外側は清く聖く見えても、内側は実際には腐敗と汚れに満ちていたからです([マタイ 23 章 27 節](#)；[第二テモテ 3 章 5 節](#)も参照)。つまり、服装を変えたり、言葉遣いや人前での振る舞いを整えたりするだけでは、神の目において私たちが聖くされることにはなりません([コロサイ 2 章 23 節](#)参照)。見かけはしばしば人を欺きます。平均的な詐欺師でも、教会に入り込んで数週間もすれば、最も霊的で信仰深い信徒のように見せかけることができますが、実際には群れを食物にしようとしているだけのことです。使徒パウロは、外見上は霊的指導者のように見えても、実はサタンのしもべである者たちに警戒するように私たちに警告しました。彼が言うように、そうした人々が「義のしもべ」を装うのは不思議ではありません。なぜなら、悪魔自身も「光の天使」を装うからです([第二コリント 11 章 13-15 節](#))。

ですから、「経験的聖化」(すなわち、信者が地上の生涯の中で実際に達成する「聖さ」)は、確かに人の行動を変化させるものですが、たとえ動機が純粋であっても、外面的で表面的な行動の変化を起こすことによって聖さが生まれるわけではありません。そうした考え方は、聖化のプロセスを完全に逆さまにしてしまうものです。真の聖化は、内側から外側へと生じるものです。つまり、他人の目に「聖く見える」ようにふるまうことではなく、心の思いや意図そのものに真の変化をもたらすことによるのみ、真の聖化は達成されるのです([第二コリント 4 章 16 節](#)；[ローマ 6 章 4-11 節](#)、[12 章 2 節](#))。「人は自らその内で考えるとおりの人間です…」([箴言 23 章 7 節英文直訳](#))。キリスト者の人生における戦いの場は、信者一人ひとりの心の中にあります([第二コリント 10 章 4-5 節](#))。私たちの心の思いを清めることによってのみ、「古い自分」は「新しい自分」と置き換えられるのです([エペソ 4 章 22-24 節](#))。この「新しい人」は、「神についての真の知識」によって心が新たにされることによって「着る」ものです([コロサイ 3 章 10-11 節](#))。すなわち、それは霊的成長という過程を通してなされるのです。

聖化の手段： この人生において「聖くなる」ための唯一の道は、霊的成長です。私たちが求める真の内的変化は、私たちの信仰と神のことばとが結びつくことによるのみ実現されます([第二ペテロ 3 章 18 節](#))。クリスチャンとして、私たちは「世の中にあっても、世に属してはいない」([ヨハネ 17 章 14-16 節](#))ように、聖化においても世の方法ではなく神の方法に従わなければなりません。私たちの主は、十字架にかかる前の夜、私たちの聖化のために祈られました。その祈りの中で、聖くなる真の道をはっきりと示しておられます：「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」([ヨハネ 17 章 17-19 節](#))。神の御言葉に含まれる真理なしには、私たちは真に聖くなることはできません([エペソ 5 章 26-27 節](#))。そして、たとえ神のことばを知っていても、それを信じず、またそれに従って生きないなら、私たちはその真理から真の益を受けることはできません([ヘブル 4 章 2 節](#))。種まきのたとえでは、「信仰の芽」が育つことができたのは、神のことばに応じようとする心という良い土地においてだけでした。神は私たちにみことばを与えておられます。霊的成長を通して聖化へと至るこの手段は、すべての人に開かれています。

霊的成長のプロセス： 最も基本的な形で言えば、霊的成長は次の四つの段階に分けることができます。私たちが成長するためには――

1. 神のことばを聞くこと。
2. それを信じること。
3. それに従って生きること。
4. そして、他の人々も同じように歩むのを助けること。

理論的には単純ですが、実際にはこの成長の過程は決して自動的に進むものではなく、困難を伴うことが少なくありません。成長には、私たちの意志(自発的な選択)の協力が必要です。つまり、自由意志がこの過程に積極的に関わる必要があります。たとえ意図が良くても、私たちはしばしばこの四つの段階を一貫して、誠実に実行することが難しいのです。それは、私たち自身に備わっている人間的な弱さ([マタイ 26 章 41 節](#))、世の誘惑や気を散らすもの([第一ヨハネ 2 章 15-17 節](#); [ルカ 8 章 14 節](#))、サタンの執拗な妨害([エペソ 6 章 11-12 節](#); [ヨブ 1 章 6-11 節](#))によって、私たちの信仰の歩みが妨げられることがあるからです。それにもかかわらず、聖書は次のように私たちを励ましています。私たちが神の計画に従って前進しようと努めるとき、神ご自身が「願うこと」から「行ふこと」まで、すべての面で助けてくださるのです([ピリピ 2 章 13 節](#))。

霊的成長の必要性： 霊的成長に代わるものはありません。キリスト者として信仰生活の中で「立ち止まる」ことは、ほとんど不可能であり、また非常に危険です。ヘブル書の

著者は、「この偉大な救いから…押し流されてしまう」危険性について警告しています([ヘブル 2 章 1-4 節](#))。私たちはこの世に生きている間、霊的に成長しているか、あるいは退化しているかのどちらかです。霊的成長を積極的に追求することによってのみ、私たちは「信仰の芽」を確実に保つことができるのです([コロサイ 1 章 22-23 節](#); [ヘブル 12 章 14 節](#))。魂を安全に保つことができるのは、「心に植えつけられた御言葉」のみです([ヤコブ 1 章 21 節](#))。ですから――

- 私たちは、悪魔の世界において警戒を怠らないようにしなければなりません([マタイ 24 章 42 節](#); [第一テサロニケ 5 章 6 節](#))。
- 私たちは救いを土台としなければなりません([ピリピ 2 章 12 節](#); [第二ペテロ 1 章 10 節](#))。
- 私たちは、霊的成長を推し進めなければなりません([ヘブル 10 章 39 節](#))。

霊的成長のテーマ： 神の聖化(聖別)のご計画を実現する唯一の方法は、霊的成長によるものです。霊的成長とは、神の御言葉を学び、それを生きることによってなされる、クリスチャンの内面的な変化のことです。聖書ではこの霊的成長の概念を、さまざまな形で表現していますが、どの場合もその呼びかけは人間の自由意志に向けられています。すなわち、私たちは変わることを望まなければならず、しかも神の方法によって変わることを望まなければなりません。聖書は、霊的成長の過程を説明し教えるために、霊的成長のプロセスを他のものと比較しながら、さまざまな例えを用いています。その中で霊的成長は、次のようなものにたとえられています：

- a. 成長する人間としての霊的成長： 今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救いに入るようになるためである。([第一ペテロ 2 章 2 節](#))
- b. 成長する植物としての霊的成長： わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。([第一コリント 3 章 6 節](#))
- c. 競技のレースとしての霊的成長： あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。([第一コリント 9 章 24-25 節](#))

- d. 戦いのために鎧を着けることとしての霊的成長: 悪魔の策略に対抗して立ち
うるために、神の武具で身を固めなさい。(エペソ 6 章 11 節)
- e. 建物を建てることとしての霊的成長: 今わたしは、主とその恵みの言とに、あ
なたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々
と共に、御国をつがせる力がある。(使徒 20 章 32 節)
- f. 歩みを完成させることとしての霊的成長: 主のみこころにかなった生活をして
真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ
増し加えるに至ることである。(コロサイ 1 章 10 節)
- g. 確固なものにすることとしての霊的成長: そして、どうか、わたしたちの主イエ
スが、そのすべての聖なる者と共にこられる時、神のみまえに、あなたがたの心を
強め、清く、責められるところのない者にして下さるように。(1 テサロニケ 3 章 13
節)
- h. 成熟・完全を目指すこととしての霊的成長: そういうわけだから、わたしたち
は、キリストの教の初歩をあとにして、完成を目ざして進もうではないか。今さら、
死んだ行いの悔改めと神への信仰、(ヘブル 6 章 1 節)
- i. 力を得ることとしての霊的成長: 最後に言う。主にあって、その偉大な力によっ
て、強くなりなさい。(エペソ 6 章 10 節)
- j. より霊的になることとしての霊的成長: (淫乱させる) 酒に酔ってはいけない。そ
れは乱行のもとである。むしろ御霊(すなわち、淫乱とは対照的な霊的成長の手段)
に満たされて、(すなわち、霊的成長の進歩を遂げなさい) (エペソ 5 章 18 節)
- k. 神に近づくこととしての霊的成長: 神に近づきなさい。そうすれば、神はあな
たがたに近づいて下さるであろう。(ヤコブ 4 章 8 節)
- l. 霊的变化・変容を遂げることとしての霊的成長: あなたがたは、この世と妥協
してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御
旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知
るべきである。(ローマ 12 章 2 節)

これら、そして他の多くの聖書箇所は、さまざまな比喻を用いて霊的成長の過程の異なる側面を強調しています。しかし、それらすべてに共通しているのは、信者である私たちは——神の御言葉に現される神の力によって——変えられなければならない、という点です。悪魔の支配するこの世に生きるキリスト者にとっての「本務(フルタイムの仕事)」とは、霊的成長であり、霊的变化であり、私たちの人生のすべての領域における聖化(せい化)なのです。

霊的成長のための四つの基本的なステップは、次の通りです。

1. 神の御言葉を聞き、学ぶこと
2. その御言葉を信じること
3. 御言葉を生活の中で実践すること
4. 他の人々も同じように成長できるよう助けること

成長するためには、聖書の真理を熱心に求め、それを心の奥深くに受け入れ、自らの生活の中で実際に行い、そして神から与えられた賜物に応じて、キリストの教会がこの重要な霊的成長の働きを進めていくために協力することが求められます。

I. 聴くこと： 私たちが霊的成長の仕組みを学び始めるにあたって、その重要性をよく心に留めておく必要があります。成長こそが、私たちの信仰を守り、保ち、強める唯一の道であり、神に仕える者として実り豊かで有効な働き手となる唯一の方法であり、さらに豊かな永遠の報いを確かなものとする唯一の道です。だからこそ、私たちはその成長のために欠かすことのできない糧——すなわち、神の御言葉に含まれる真理——を熱心に求めなければなりません。

台所： 神の「台所(キッチン)」とは、聖書のことです。そこには、霊的成長に必要なあらゆる基本的な霊的食物が完全に備えられています。成熟に至るために私たちが必要とするすべての真理は、聖書の中に見いだすことができるのです。しかし問題は、その真理をどのようにして「実際に使える形」で取り出すかという点にあります。もちろん、聖書を自分で読むことによっても多くの励ましを得ることができますし、実際、すべてのクリスチャンは神の言葉を最も純粋な形で探し求める責任を負っています。祈りと同様に、聖書を個人的に読み、黙想することは霊的成長において絶対に欠かせません。ただし、そのような個人的聖書研究だけで十分であると考えるのは誤りです。聖書を読むことは霊的成長において極めて重要ですが、それが**教え(説き明かし)**の代わりになるわけではありません。このたとえで言うなら、パンが欲しくて台所へ行ったのに、そこにあるのが小麦粉だけだったと想像してみてください。聖書には大量の真理が詰まっていますが、その多くは「小麦粉」のままであり、すぐに食べられる「出来上が

ったパン」ではありません。そこで聖霊は教える賜物を与えられた人々をキリストのからだ(教会)の中に備え、聖書から真理を「固形食」として取り出すための働きを委ねられました(いわば霊的な料理です;[エペソ 4 章 11-16 節](#)参照)。霊的成長を最大化し、また誤った、危険な教義から守られるためにも、このような聖霊に賜物を与えられた教師たちの存在は欠かせません。ただし、教師が本当に適切に備えられ(ギリシヤ語・ヘブル語・神学・古代史・教会史などを学び)、真に主イエス・キリストに従っているかどうかということは極めて重要です。残念ながら、現代において「クリスチャン」を名乗る多くの人々が、誤って備えられていない、あるいは動機が不純、もしくは明らかに偽りを教える人々の指導の下に置かれています。しかし、まことに主イエス・キリストを信じる者であり、神とのより深い交わりを霊的成長を通して心から望む者は、真理を求め続けるでしょう。そして神の恵みによって、ついには「台所をよく知っている」真の教師に出会うことができるのです。

聖書のすべてを最初の一読で理解することが難しいという事実自体が、備えられた教師(教える賜物を持つ者)の必要性を明らかに示しています。新約聖書の書簡を一つ例に取ってみましょう。これらの書簡は、すでに使徒たちから直接、徹底的な教えを受けていた信者たちに宛てて書かれたものでした([第二テモテ 2 章 2 節](#); [使徒行伝 20 章 7-12 節](#))。このため、これらの書簡がしばしば理解しにくい理由は、そこに繰り返して述べられている原則をすでに熟知していた人々向けに書かれているからなのです。私たちは、使徒たちの直接的な教えという恩恵を受けていませんし、まったく異なる時代・文化・言語の背景に生きているため、これらの手紙に込められた教理のすべてを正確に理解することは決して容易ではありません。言ってみれば、そこには埋めるべき多くの「空白」が存在します。私たちは、手紙が送られた当時の文化的・言語的・教理的背景を再構築しなければならないのです。さらに、聖書のどの一書も単独で読むことはできません。聖書は「神の靈感による」メッセージであり([第二ペテロ 1 章 20-21 節](#))、聖書全体の有機的な一部としてそれぞれの書が存在します。したがって、聖書の一書一書の教えは、聖書全体との関連において初めて正しく理解されるのです。これは、たとえ一生をかけたとしても、一人の人間にとっては容易ならざる大業であることは言うまでもありません。

信者である私たちは、霊的な糧を求めて神の「台所」を探し回りながら、つまみ食いできるものを探してページをめくっているようなものです。もし聖書とその教えをすべて自分の力で理解し、「自分で全部料理しなければならない」としたら、その大変さに気おくれして当然でしょう。しかし、神はすでにこの問題に対処しておられます。イエス・キリストの教会には、完全に調和のとれた「分業体制」が備えられているのです。救いの時に、聖霊はキリストを信じるすべての者に、それぞれ特有の霊的使命と、それを果

たすための「賜物」をお与えになります([第一コリント 12 章 4-11 節](#))。そして、教会を建て上げるために必要なすべての働きとともに、神は「料理人」——すなわち、神の民のためにみ言葉を整え、養う教師たち——も備えられました：

そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。([エペソ 4 章 11-13 節](#))

料理人：[第一コリント 12 章 12-31 節](#)で、パウロは教会を「一つの体」にたとえています。彼は、体のすべての器官がその生命と健康にとって欠かせないのと同じように、キリストの教会もまた、あらゆる「肢体(メンバー)」を必要としていると説明します。なぜなら、それぞれの肢体が教会にとって重要な奉仕を担っているからです。キリストの「からだ」の中では、すべての「肢体」がチームとして協力し合い、神がそれぞれに与えられた務めを果たすことによって、教会全体が正しく機能します([第一コリント 12 章 11 節](#))。その重要な働きの一つが、信者一人ひとりの霊的成長を助けることです。この霊的成長の過程の中で、「料理人」としての役割——すなわち、神の言葉という生の素材から霊的な食事を「消化しやすい形」に整える務め——が必要になります。聖書の完成後、初期教会において活動していた使徒や預言者の職務はすでに終わりました。したがって、この「霊的な食事」を用意する責任は、現在では主に牧師・教師(pastor-teacher)に委ねられています([エペソ 4 章 11 節](#))。ですから、信者が自分に必要な霊的な糧を「買い求める(shopping)」際には、この点を心に留めておく必要があります。すなわち、神によって真に任命された、み言葉を教える働きを担う人々を探し求めることが大切なのです。

これは決して、「自分で聖書を読んだり学んだりしなくてもいい」という意味ではありません。むしろ、信者一人ひとりが自ら聖書に親しみ、みことばを探り求めることはとても大切です。そうしなければ、誤った教えに惑わされてしまう危険があるからです([使徒行伝 17 章 11 節](#)参照)。しかし、健康や法律、経済のことを自分一人で完璧にこなすことが難しいのと同じように、霊的な歩みの中でも「自分だけでやる」ことには限界があります。個人の聖書研究は大切ですが、それはあくまで補いであって、神が定められたみことばの教えの働きに代わるものではありません([第一テモテ 5 章 17 節](#)；[ヘブル 13 章 17 節](#))。実際のところ、他の人の助けを受け入れることは、多くの人にとって簡単ではありません。イエスの時代の人々も、神のことばを教える方を素直に受け入れることができず、つまづいたのです([マタイ 13 章 54-56 節](#)；[ヨハネ 6 章 60 節](#)参照)。でも、

神の言葉を学ぶために他の人から教えを受けることは、決して恥ずかしいことではありません。それは、神ご自身が私たちの霊的成長のために備えてくださった恵みの方法なのです。私たちがみ言葉の教えを聞き続けることは、霊的に成長するために欠かせません。それを怠ってしまうと、信仰が少しずつ弱まり、後退してしまう危険があります。ヘブル書の中で著者は、礼拝に集まることや、み言葉の教えを聞くことをやめてしまった人々を戒めています([ヘブル 10 章 25 節](#))。彼らは耳が鈍くなり、もう一度信仰の初歩から教えを受ける必要があるほど霊的に幼くなってしまったのです([ヘブル 5 章 11 節-6 章 2 節](#))。そして、み言葉の食事をおろそかにした結果、信仰そのものが危うくなってしまったのです([ヘブル 10 章 35-39 節](#))。ですから、私たちはへりくだって他の人の助けを受け入れる心を持ち、神の言葉という霊の糧をいただき続けることが大切です。神は、私たちが成長するために必要な導き手を必ず備えてくださいます([詩篇 25 篇 9 節](#); [使徒行伝 18 章 24-26 節](#))。私たちは、その恵みの手を信頼して、感謝と喜びをもってみことばに生きる者でありたいのです。

良い「霊の料理人（教え手）」を選ぶ：今日のアメリカのクリスチャンは、これまでの歴史の中でもおそらく最も多くの選択肢を持っています。教派、教会、パラチャーチ団体、そして独立したミニストリー——そのすべてが「クリスチャン」と名乗っています。このようにたくさんの選択肢があるのは一見すばらしいことのようにですが、本当に良い聖書の教えを見つけることは、かえって難しい場合があります。しかも、「羊の中にまぎれた狼」も多く存在するため、その過程は危険を伴うこともあります([マタイ 7 章 15-20 節](#))。聖書は繰り返し、偽りの教えに注意するようにと警告しています([マタイ 24 章 24 節](#); [ローマ 16 章 17-18 節](#); [ヘブル 13 章 9 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-22 節](#); [ユダ 4-13 節](#))、ですから、ここで少し率直な助言をしておくことがふさわしいでしょう。：

－ まず第一に：み言葉を中心とする教会を探しましょう。何よりもまず、神のことばの教えが中心に据えられている教会やミニストリーを探すことが大切です。なぜなら、信仰が成長するのは、神のことばとともに歩むときだけだからです([ローマ 10 章 17 節](#))。クリスチャン同士の交わりの中としてはとても良い働きをしている団体も多くあります。けれども中には、私たちが信仰を強めるために欠かせない「霊の食物」——神のことばの教え——の提供が弱いところもあるのです。

第二に：ひとつの教会・集まりにとどまりましょう。次に大切なのは、自分の霊的な必要を満たしてくれる教会やグループを見つけたら、できるだけ一つのところに腰を据えることです。どんな集まりでも、なじむまでには時間がかかります。また、あちこちの教えをつまみ食いするような形では、実際のところ、霊的に成長することはできません。私たちが成長していくためには、一貫した教えを受け続けることが必要です。自分であれ

これと教えを比較して混乱してしまうと、信仰がぐらつき、心の中に争いや不安が生まれてしまいます([第二テモテ 2 章 14 節](#))。ですから、「これは本当に神さまの真理だ」と確信できる教えや集まりに出会えたなら、そこにしっかりととどまり、その教えに耳を傾け続けてください。

－ 第三に: 自分の良心が「おかしい」と感じる団体には関わらないこと。三つ目の大切な注意点は、自分の常識や良心が「これは何かおかしい」と感じるようなグループには、関わらないようにすることです。私たちが生きる現代の世界には、「キリスト教」を名乗りながらも、実際には聖書の真理からかけ離れた「似て非なる」団体が数多く存在します。そうしたいわゆる「偽キリスト教的」な環境の中で、避けるべき典型的な三つのパターンが思い浮かびます。:

a. **聖書以外の書物を重んじるグループ:**

第一に避けるべきなのは、聖書以外の書物や教えを、聖書よりも重んじるグループです。人は昔から、「聖書にはない特別な知識(“秘密の啓示”)」に惹かれる傾向があります。これは、初代教会の時代から問題となっていたグノーシス主義の異端にまでさかのぼります。今日でも同じことが起こっています。たとえば、聖書の上に「新しい啓示」として加えられた書物(例: 「モルモン書」)、聖書に“付録”のように加えられた外典(アポクリファ)、ある教師や説教者の言葉がまるで聖書そのものと同じ、あるいはそれ以上の権威を持つかのように扱われる場合。——こうしたものを教えたり広めたりしている団体には、関わらないようにしましょう。私たちの信仰の唯一の基準は、聖書です。[\(第二テモテ 3 章 16 節\)](#)。聖書だけが、神の真理を完全に伝える“唯一の霊の糧”なのです。

b. **聖書よりもカリスマ的指導者を強調するグループ:** 私たち人間はだれしも、「何でも知っている特別な指導者に従いたい」という思いを持っています。けれども、クリスチャンが従うべきお方はただ一人、主イエス・キリストです。どんなに優れた人でも、完全ではありません。人間を偶像のようにあがめ、その人の言葉を神の言葉のように扱うことは、信仰の道を誤らせます。[\(第一コリント 3 章 21 節\)](#) [\(ガラテヤ 4 章 17 節\)](#)

c. **聖書よりも宗教的体験を重視するグループ:** だれしも、神さまの力が奇跡として目の前に現れるのを見てみたい——そう思うものです。主イエスの時代の人々も、しばしばイエスに「しるしを見せてください」と求めました。もし聖書に書かれているような奇跡が起こったら、どんなに感動的だろうか

……そう感じるのは自然なことです。けれども、今の時代に神が最も力を注がれているのは、奇跡ではなく、「完成された神のことば(聖書)」です。イエス・キリストご自身が「生けるみことば」であることを思えば、聖書が私たちにとって最大の神の働きであることがわかります。もちろん、主イエスや使徒たちが行われた奇跡は、彼らが神に遣わされたことを証しするためのものでした。しかし、今の時代、神がなさっておられる本当の「奇跡」は、罪の中にあった私たちがキリストによって新しく生まれ変わることなのです([ヨハネ 3 章 8 節](#))。これこそが、目には見えなくても、霊的に最も力強い神のわざです。ですから、私たちは「しるし」や「預言」や「異言」などの体験を追い求めるのではなく、神ご自身と、神のことば(聖書)に心を向けるべきなのです。聖書は、「私たちは、見たり感じたりするものよりも、神のことばのほうが確かである」と教えています([第二ペテロ 1 章 16-21 節](#))。「癒し」「異言」「特別な啓示」などの霊的体験ばかりを追いかけることは、良くて信仰の成長を妨げる「気を散らすもの」であり([マタイ 16 章 4 節](#))、最悪の場合は非常に危険です。そうした体験を「自分の力で起こそう」とすれば、次第に良心が鈍くなり、最初は間違っていると思っていた行動が「当たり前」に見えてきてしまいます([エペソ 4 章 17-18 節](#))。その結果、友人や家族、健全な教会とのつながりから離れ、閉ざされた仲間だけの世界にとじこもってしまう——これはすべてのカルト(異端)に共通する特徴です。

まとめ：私たち一人ひとりにとって、どのような形の「霊的な養いの場」が最もふさわしいかを見つけるのは、たしかに簡単なことではありません。ときには、その道のりが daunting (気が遠くなるように) 思えることもあるでしょう。しかし、神が霊的成長のための仕組みを定めてくださったのであれば、その仕組みを通して私たちのすべての必要を満たす方法も、神ご自身が必ず備えてくださるのです。成長を本当に願い、助けを求める心があるなら、神はきっと、必要なメッセンジャー(語る者)、教師、教会や働きを用意してくださいます。空の鳥を養い、野の花を美しく装わせてくださる愛の父なる神が、キリスト・イエスにあって、あなたに必要なすべての霊的な糧を備えてくださらないはずがありません。また、もし知恵や導きが必要なときには、神は惜しみなく与えてくださる方です。ですから、恐れることなく、信頼して神の導きを求めていきましょう。神は必ず、あなたが成長できる場と人を用意してくださいます。([マタイ 6 章 25-34 節](#); [ヤコブ 1 章 5 節](#))。